

『妙好人伝』（初篇）の信仰内容と性格

柏原 祐 泉

一般に流布している『妙好人伝』は、全六篇十二巻として一括した形をとっており、その初篇は西本願寺派浄泉寺仰誓の編纂、第二篇～第五篇は同派専精寺僧純の編纂、続篇（第六篇）は象王（未詳）の編纂とされている。その刊行は初篇～第五篇が天保十三年（一八四二）～安政五年（一八五八）の間に逐次僧純により行われ、続篇（第六篇）は嘉永五年（一八五二）になされ、以後一括して板行が重ねられた。また、妙好人がとくに真宗の在俗の篤信者を中心とした人々に対する呼称となったのは、仰誓編『妙好人伝』の板行以後のことと推定されている。この、妙好人を単なる浄土教の念仏者ではなく、特別な真宗在俗の篤信者とした点に、その歴史的背景のなかで真宗の理想的信者像を求めようとした意味があったわけである。

しかし、右の板本の初篇『妙好人伝』については、今日多

くの問題が提起されている。即ちその巻頭の文政元年（一八一八）誓鑑（仰誓門人）の序文や巻末の天保十三年僧純の跋文によると、それは当初仰誓が真宗篤信者の伝記を「妙好人伝」として蒐集したのを、仰誓嗣子履善らが仰誓歿後二十五回忌相当の文政元年に板行を企てたが成らず、のち僧純が天保十一年（一八四〇）春以後三四本の「妙好人伝」を集めて校正し、同十三年に板行したもので、それは仰誓（寛政六年一七九四歿）の歿後四十八年目であった。したがって初篇には仰誓当初の編纂状態を忠実に留めているとはいえず、とくに僧純の校正板行時に大幅な加減があったことが指摘されている。そして、このことを決定的な形で明らかにしたのは、土井順一氏による写本『妙好人伝』二巻本の発掘とその板本初篇との比較論であった。その詳細は省くが、板本二十二名の説話と写本三十六名の説話とを比較研究した結果、写本が仰誓の原撰本の面影を伝えるもので、板本は僧純によって変質させられたものとされた。この写本の発掘と比較研究とは

『妙好人伝』研究に画期的な意義をもつもので、この結果、少なくとも、筆者を含めて従来の『妙好人伝』研究を六篇一括の形で行なうことに、再検討を要することとなったのである。

土井氏によれば、僧純による変質の内容は、師恩・国恩を報謝する妙好人を画こうとし、「愛山護法・本山崇敬・国法遵守型人物に造型され」、とくに天保以後の西本願寺財政再建のための懇志を強調しているという。それに対し、仰誓の当初の編纂は、妙好人の言行を殆んど伝聞により収集し、「浄土真宗信者の行信を増進する為の手引書³⁾」とするにあってとされた。ついで、こうした両本の比較研究は、さらに他の研究者からもなされてきた。すなわち朝枝善照氏³⁾は、写本三十六話中から板本二十二話中に僧純板行時に採用されたものと、採用されなかったものとを各表示して考察し、各その原因を考察しておられるが、その採用の原因には、その言行が、念仏者の生活教訓になるものの外、本山崇敬、小児信仰、改宗などに関するものを多く挙げ、不採用にはこれらの類話が多いことに注目しておられるようである。また、板本のみに付加された五話中の一話（加州与市伝）は履善著『教導記』から引用され、そこへ同『記』にない真宗信者日常生活の救済の喜び、本山崇敬、国恩感謝に関する三逸話が増えられたことに、今後の課題があるとされている。また石見九

兵衛の物語を両本で比べると、板本には公儀の庇護に落涙感謝する話が付加され、これは仰誓の段階ではみられぬ僧純の加筆とみることもできるといふ。写本の仰誓の場合には教化者の参考的な面があるのに対し、僧純による板本では一般読者を対象にされていると考察されている。要するに氏においても両本の異質性に注意されているのである。つぎに竜口明生氏³⁾もまた板本初篇と写本との質的相違を論じ、写本三十六話の大部分は仰誓の妙好人観により収録されたとされる。即ち仰誓は、ただ深い念仏者であるばかりでなく、さらに淤泥の如き世俗の中でその環境に左右されず念仏相続している人、即ち「経済的貧困、精神的不安、肉体的苦痛、更には聴聞する為に地理的に不便な環境」などの困難な状況下での篤信者という条件を満たす人を妙好人としたとし、それを写本の全物語について考証されている。そして、この点が板本の誓鑑の序で正確に把握されず、単なる勝れた篤信者と解され、さらに僧純による板行の継続や象王の続編に至る過程で、「妙好人像は仰誓のそれとは全く異質なもの」と変遷してしまつた」と結論づけられた。前記朝枝氏の考察とともに、甚だ示唆的な考証である。

二

ところで、筆者はかつて板本『妙好人伝』全六篇を総括し

て考察し、その歴史的な意味を考証したことがあった。⁽⁶⁾すなわち、全篇に封建的治世・倫理への順応性を示す物語、往生物語、特異物語などが多いことを数的に示し、全体に封建制への随順を妙好人に要求していること、非真宗的な来迎思想などの往生物語や特異な靈驗物語などの実体的な事実を示すことにより、幕末の現世利益的新宗教の勃興や教団動揺のなかで、真宗信仰の利益を強調し、より一層具象的に実証しようとする意味が考えられること、などを論じた。しかし右のごとく、少なくとも板本初篇と写本との異質性が諸氏によって論ぜられ、仰誓と僧純との妙好人観の相異が指摘されつつある以上、筆者のごとく板本全篇を一括して取扱ひ、仰誓・僧純・象王に共通した妙好人観を求めるとは軽々には許されなくなつた。即ち、従来の観点を再点検するために、少なくとも右の仰誓の妙好人観の原型を示すとされる写本の内容について、筆者なりの考察を避けられなくなつていたのである。そこで本稿では、すでに諸氏によって両本の詳細な比較考証がなされてはいるが、さらに筆者の視点による写本内容の検討により、とくに仰誓の妙好人観への再考察を行つてみたいとおもうのである。

まず両本の具体的な記述の相違をみるために、両本とも最大量のスペースを用い、もっとも典型的な妙好人として力説している大和国清九郎の物語につき、両本の記述内容を列挙

し比較してみよう。

「写本」和州清九郎伝

- (1)裏方(東本願寺派)光蓮寺門徒。(2)稟性魯鈍、極貧。(3)今年毎夕飯前、主家から母の安否に往復する親孝行。(4)今年(寛延二年 一七四九)七〇歳在住。(5)二年余篤を聞き、法を聞けと勧める鳥と賞した蓮如の因縁で入信。(6)薪を売り高利を食らず。(7)毎年五七度本山参詣し薪を洗い献上、門主両堂仏飯焚材に当つ。(8)領主の褒賞を固辞、領内山林樹木伐採勝手を許され、本山参詣の散錢一貫文下賜。(9)養子を迎え茅屋に隠居。(10)寛延二年春編者山和へ出向し清九郎其他の信者等に面接、裏方門徒宮川三左衛門等の篤信者あり。(11)同年夏清九郎当国(ここでは伊賀国)で十四日逗留。(12)裏方門主大和下向、清九郎無袴で面接、「善知識ノ直ノ御コトハ」の感想を聞かれ、有難いが悪人救済の仏恩に比すれば「御門跡様(門主)ノ御言ハサホトニナキ也」と。(13)延享五年(一七四八)学僧玉潭清九郎と越中へ往復、清九郎老体の道中に称名を喜び、仏恩を思つて冷水の川を渡り、仏の願船を思つて道中馬に乗り、馬に粉糠五升を買与え謝す。(14)編者翌年京都で清九郎に会うに、越中念仏者との出会いを我身の喜びと云う。(15)同年七月参詣中菜種売却代十五匁の残金七匁を盗難に会い、「ワツカナレトモ取ル、モノアリテ嬉ク存スル也」と、生来の凡夫が仏の慈悲で

盗心もなく、同行に恥辱をかけぬ生活を喜ぶ。(ウ)時に不思議に、本山献上予定の白銀十三匁は盗られず、「開山上人ノ物ナレハトラス」と感じいり、直に献上。(シ)某時老母を背負い本山へ参詣、二十余里を往復。(ツ)寛延二年冬より中風病臥、剃髪入道し、翌年八月七十一歳で往生。

〔板本初篇〕和州清九郎伝

(1)写本の(ウ)と同内容。但し宿業かという。(2)イと同内容。(3)ホと同内容。(4)リと同内容。(5)ヌと同内容。但し裏方門徒宮川三左衛門のことなし。(6)レと同内容。(7)親の枕を天井に吊し闇中足蹴にすれば恐ろしと、見るたびに親恩を感謝。(8)イと同内容。但し本山散参一貫下賜をいわず、褒賞十貫文下賜を全部本山へ献上と云。(9)ヘと同内容。(10)トと同内容。(11)博奕喧嘩を好む隣村の久六、養子となり感化で孝行念仏者となる。(12)久六と謀り田一枚を寺へ寄進。(13)領主の母に呼ばれ入信のことを語り、喜ばしむ。(14)ウと同内容。但し「裏方御門主」を「善知識様」と替え、「只今御前へ召出され御言に預りし嬉しさ、身の毛いよたち難有きに」と、浄土での如来の直言に比し喜ぶとする。(15)同行が好意で集めた清九郎茅屋再建の金で、仏の恵みと檀那寺へ仏具を求め寄進。(16)ウと同内容。(17)ホと同内容。(18)イと同内容。(19)某年十一月二十七日親鸞祥月命日の速夜に裸身で雪中に臥し、養子久六と宗祖の恩を憶う。(20)イと同内容。

『妙好人伝』(初篇)の信仰内容と性格(柏原)

但し久六の氣遣いあるも、苦中に念仏絶えず、七十三歳で往生とする。続いて、親鸞門弟覚信臨終まで念仏するを親鸞落涙感銘したという逸話を賛文に付す。

以上が写本と板本初篇の清九郎伝の内容項目で、——線の部分は各両本相互に掲載していない内容であることを示している。これによると、まず写本の(イ)(ヌ)(ウ)などの裏方(東本願寺)に関する部分が板本では削除され、朝枝氏、土井氏などにより注意されたごとく、これは両本の他の伝記の比較でも指摘できることで、板本が西本願寺派の立場を打ちだそうとしていることがわかる。また(ニ)(ル)などは写本原编者仰誓の直接見聞に関わる部分で、板本の年次との隔りを示し、板本の間接性を現している。とくに(ウ)で清九郎が門主の直言を仏恩に比し「サホトニナキ也」と受けとめたのに対し、板本の同事項(4)では「身の毛いよたち難有き」と感激しているのは、板本が門主志向をより強く打ちだす点で注目すべきである。これに対し板本のみにもみられる部分には、(7)(11)や(19)(20)の一部に示される親孝行の強調、(8)(4)の本山・門主志向、(12)(15)の末寺・檀那寺志向、(13)の領主志向などに関するものが付加されている。したがって、板本がより強い封建体制・倫理への順応型の妙好人を求めていることが明らかであり、この点にも先の諸氏が指摘された写本から板本への変化を認めざるをえなくなるであろう。

しかしここで、両本の異質性が全く決定的であるかどうか、写本の清九郎を今一度点検する必要があるとおもわれる。即ちそこには、(ト)(タ)などや(チ)の一部のような本山志向、(ハ)などの親孝行、(チ)の領主志向などを示すものがあり、とくに(タ)は写本のみに出る本山志向であるが、これらの点は板本より比重は軽いとはいえ、同じく封建体制・倫理への順応性を温存するものというべきであろう。また写本でも清九郎を、(ロ)魯鈍極貧、(ハ)清貧正直、(三)盜難感謝などの対境克己型の妙好人としているが、これらの点も再考すべき問題がある。要するに、以上の如く比較してみれば、初篇板本に確かに僧純のより強い時代順応型清九郎が画かれたことが推定されるが、しかし一面、写本の仰誓の場合にも必ずしも純念仏者型に終わらない、順応型を理想像に含むことを否定できないのである。これらの問題をさらに写本三十六話全体から、改めて概観してみたいとおもう。

三

写本全本の具体的な考察に入る前に、まず確認しておかねばならないのは、妙好人の信仰生活における内面性の問題である。即ち先の清九郎に例をとれば、彼は越中往復の道中の苦難に、「形ハ七十、心ハイツモ十八ニテイサマシク称名ヲヨロコハセ下サレ候へハ」草臥れずとして称名に励み、冷水

の川を渡って、「川一ツモワタラスニ助給フ御恩ノフカキコトヲオモヘハ、コノ川グラキ五ヤ六ワタルトテ物ノ数ニハ候ハス」と仏恩を喜び、駅馬に乗せられて、「本願ノ舟ニノリ、又ソノ上ニ馬ニノリ、サテくアリカタヤ」と他力信仰に徹底した姿を示したという。そこには、生活全体が信仰を中核として営まれている姿がよく示されている。常に外境に把われず、むしろ外境を内面的世界から見直す信仰中心の価値転換がある。したがって、その生活は内面的に常に充足的であり自律的であり安定的である。『妙好人伝』に登場する大部分の妙好人には、このような信仰的内面性の世界で確立された、価値転換と充足性があることを、まず確認しなければならない。

しかし、このような内面的充足と併せ、外面的、外境的世界への価値転換を経た対応が、歴史的にいかなる意味をもつか、或は内面的充足と外境的対応姿勢とに注目して編纂された『妙好人伝』が、同じく歴史的にいかなる意味をもつか、これらは妙好人の信仰生活が歴史のなかで果す機能性の問題として、改めて考察されなければならない。これが筆者の妙好人に対する課題であるが、この視点から右の写本の内容を再考したいとおもうのである。そこで、先の清九郎伝も含めて、注目される項目を拾うと、まず第一に、「毎年一兩度御本山へ参詣スルニ、……別ニ蔵ヲホリテ市ニ沽リ、コノ価ヲ

御本寺へサ、ケ年々參詣愈ルコトナシ」(1播州治郎右衛門)、
「コノ女メ(八歳)生来イマタ御本山へ詣セサルコトヲ悲
ミ」(2河州阿籍)のごとく(3清九郎、14荒川総右衛門、9常州
忠左衛門なども)、本山や法主志向を示す話がある。信仰的に
祖影の存する本山に頼くことは自然であるが、近世本末制の
固定した教団体制内での情熱的行動である点に、先述のよう
な封建的順応性へ機能することをおもわざるをえない。つぎ
に、「ソノ身至テ貧クシテ樵蘇^{キョソ}ノ業ヲシテ渡世」(1治郎右衛
門)しながら「貧ヲ憂ヘサル心」(同伝編者評)をもつて暮す
貧困者や(清九郎、18安芸市郎兵衛なども)、「私壯年ノ時ハ人
ニスクレタル悪者ニテ、アラユル財宝ミナ酒ニ飲ツクシ賭ニ
ウチハタシテ、……御本尊ヲ質ニ入」れた無頼者が「サホト
ノ悪人ヲモニクシト思召サス助給フコトハ、イカナル大悲ン
ヤ」(21三河五郎右衛門)と信仰的に改心する話(12石州林助、
25近江五兵衛なども)などが目立つが、これらも正直・質朴な
ど(清九郎、7江州次郎右衛門、11石州儀兵衛、15備後五郎作な
ど)と共に、近世封建体制のなかでは、貧困への忍従や生活
倫理の教訓的な意味で受容されえたとであろう。

写本の伝記中でも意表をつくのは、災難を却つて宗教的に
喜ぶ話である。清九郎が盗難に会つて仏の慈悲を喜んだ話は
先にあげたが、その他、19安芸甚右衛門も鳥目十貫文其他を
盗られ、「盗人ノ入モ、借ヲ還スカ今貸スカトヤラン聴聞ス

『妙好人伝』(初篇)の信仰内容と性格(柏原)

レハ、ミナ前世ノ約束也。約束ナラハ水ニモ盪シ火ニモツク
ヘシ。ソレニ比レハ盗ハ高ノミエタルコトナリ」として、自
分に課せられた前世の約束と解し、また、20石見九兵衛は夏
に何者かが溝を塞ぎ我田に水一滴も入らぬようにしたのをみ
て、仏前に妻子を集め、「コレハ我前世二人ノ田ヘカ、ル水
ヲセキトメタル報ナルヘシ。……前世ノ業報也ト氣フサセ
下サル、ハ偏ニ御教化ノ恩徳ナリ。コノ御礼ヲ申サテハアル
ヘカラス」と參詣させたという。これらの話は諸々の災難を
専ら内面的にうけとめ、信仰深化の動機に逆転させているわ
けで、甚だ鮮かな価値転換が行われており、感動的でさへあ
る。しかし一面、外面的な社会悪に対しては全く消極的、無
批判的で、盲従的でさへあるといわねばならない。したがつ
て、主観的、内面的にいかん充足化されても、客観的、社会
的には社会悪を容認することに作用するであろう。それは引
いては、社会的人格として生きることの逃避ともなり、受動
的、順応的生活へと連動するであろう。つぎに、右の災難報
謝譚とでも呼ぶべきものと関連して注目されるのは、業報
論、宿業論である。右の安芸甚右衛門や石見九兵衛の場合に
も、共に災難を「前世ノ約束」「前世ノ業報」と受けとめて
いたが、最も典型的な形で示されているのは1播州治郎右衛
門の場合である。彼は先に触れたごとく貧困であつたが、裕
福な同信の京都西陣の菱屋了玄から金子を与えられて固辞

し、その理由に、

貧福苦業ハ前世ノ業因ヨリアラハル、ユヘ、貴方ノ如ク富裕ナルモ前業也。我コトク貧賤ナルモ宿業也。業力ハ聖者モ免給フコトアタハス。況ヤ我等鄙夫ニ於テヲヤ。ソノウヘ阿弥陀ホトケハ、……我カ貧苦ヲ不便ト思召サハ福利ヲアタヘタクモ思召ヘケレトモ、某カ業感ノナストコロ、仏モ如之何トモシ給フコト能ハス。仏スラ業力ヲ軋シ給ハヌモノヲ、貴方コレヲ救ハントスルハ、因果ノ理ヲワキマヘ給ハヌト云モノ也。

と応えたという。治郎右衛門の伝は板本にも掲載され、右の引文も同文を載せているが、しかし——線部分は写本のみにあつて板本では削除されている文である。とくに削除部分は、現世の生活形態が仏力も及ばぬ宿業の所感とされ、それはとくに「況ヤ我等鄙夫ニ於テヲヤ」として、貧困者により一層決定的であると表現されている。仏教ないし真宗の業論が本来このような表現をとるものかどうか、甚だ問題とおもふが、少なくとも右によれば、封建社会での下層民の生活は前業の所感として、個人的な宿命として甘受、忍従する外はないこととなる。これが近世身分制社会の固定化により強く機能することは、いうまでもないであろう。ここでは、写本の仰誓の場合にそれが却って強く表現されていることを、注意したいとおもふ。

なお最後に注目したいのは、写本には奇譚、奇異に類する

物語が多いことである。先の清九郎伝でも、本山献上予定の白銀のみは盗られなかった「不思議」が出ていたが、その他、4伊賀永田屋六兵衛は臨終に檀那寺住職の夢に現れ、浄土往生を告げ同寺の本尊前で命終する夢告をしたといい、6和州辰三郎は十四歳で老貴僧の夢告で法名を道誓とし、老僧「今クルモワカレハ同シ道シバノ」辱三郎「誓ノ舟ニノルンウレシキ」と歌を交し、道誓の下字は誓か清かと尋ねて、老僧「チカヒシモキヨキモ同シコ、ロカラ六字ノ外ニ名コソアルマシ」と応じ、夢醒め、やがて往生したという。また、8勢州治左衛門の子市十郎は七歳で念仏往生したが、「茶毗セシニ灰コト／＼ク五色ニテ、全身五色ノ舍利トナリ、ナカンツク大髓化シテ地藏菩薩ノ尊形トナレリ」という。また、10京都七郎右衛門は本山茶所で頓死したが、同時刻に弟宅へ現れ、「開山ノ御召ニヨリテ参ル也跡ノ孫子ニココロエテタベ」と告げたという。また、15備後五郎作も篤信者で近江郷ノ村滞在中、「我ハ善信（親鸞）也」と称する貴僧が庄屋の夢などに現れ、五郎作からの聞法を勧めたという。また、17安芸喜兵衛が本山へ蓮如の『御文』下付を類出たとき、門主良如は事前にそのことを予告したという。また、29出雲神谷備後の祖先は大坂石山合戦に、本願寺頭如から得た親鸞筆名号を低頭拝礼中に矢を通れ、今に矢除の名号として伝持し、歴代門主が拝礼添簡するという。また、35安芸喜八は強剛な

獵師であったが、梟の殺生禁断を勧告する生贖的な夢告を確
認し、発心したという。

このような奇譚の類は、奇跡を求めず平凡な日常生活中で
の信仰継続を中心としてゆく真宗信仰形態からみれば、いず
れもかなり異状である。しかし甚だ通俗的で、入信督促の題
材には適している。なお奇譚と併せ、写本には2、5、6、
8、31、32、36などの各伝で幼少年信者をあげているが、共
に真宗信仰の利益とその実証性を強調する上で、説得的な役
割を果たしたといえよう。

四

以上のように考察してくれば、仰誓が編纂したとみられる
写本の内容にも、かなりの封建体制、封建倫理への順応性を
示す物語のあることがわかる。それは板本の領主志向などに
比すればかなり弱いし、写本清九郎伝の門主対応の姿勢など
は明らかに志向性が薄い。しかし封建制下の教団構造や社会
体制のなかで考察すれば、写本の順応性も板本の場合と区別
し難くなるであろう。

さらにまた、貧困生活の内面的超脱や諸災難の信仰的受容
などは、先述のごとく宗教的な価値転換によるエクスタシー
があり、まさしく妙好人の真髓に触れる感があるが、しかし
これも歴史状況のなかでみれば忍従や社会的逃避へ機能し、

『妙好人伝』（初篇）の信仰内容と性格（柏原）

それはこのような形でのエクスタシーの度合いと正比例し相
乗化するものといえよう。それがそのまま封建的順応性を意
味することも明らかであろう。この点については、無頼者改
心談なども同じ意味をもつといつてよい。なお、写本に甚だ
多くの奇譚を収録していることなどは、本書が念仏利益的な
ものを打ちだした教化的性格をもつことを示すといえよう。

このようにみれば、刊本初篇と写本との間には、書誌的な
考証はともかくとして、妙好人に求めた理想像の上では、必
ずしも全く異質的とはいえないことになる。もちろん板本採
用の物語に、かなりの加減潤色があることは事実であり、そ
れによって板本がより強い順応型の妙好人を画きだしたこと
を認めなければならぬが、しかしそれは写本を根本的に改
変してしまつたのでなく、写本のもつ教訓性、教化性をより
強く強調したものとみるべきで、両本の果す歴史的役割は大
差はないとみたいのである。

- 1 この点に関し、筆者は旧著『近世庶民仏教の研究』（九頁、
十六頁など）で、文政元年仰誓『妙好人伝』編纂以後のことと
したが、後述のごとく同年は履善らの出版企画の年であり、板
行は更に後になるので、旧著の指摘を改めておきたい。
- 2 土井氏の諸論考は同氏近著『妙好人伝の研究―新資料を中心
として』（昭和五十六年刊）を参照。写本は本書資料篇に収録。
前著八十六頁、四十六頁。
- 3 朝枝氏「初篇『妙好人伝』の一考察」（仏教史学研究二〇一）。
- 4 竜口氏「仰誓の妙好人観」（竜谷大学、仏教史研究一四）。
- 5 拙稿「幕末における『妙好人伝』編纂の意味」（拙著『近世
庶民仏教の研究』所収）。（大谷大学教授・文博）